

憂目の巫女

成

人

指

定

Adult
Only

【後編】

憂目の巫女

【後編】

成人向け作品

こまり屋

この物語はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

【後編目次】

第七章	深夜の奇祭……………	5
第八章	異形との遭逢……………	47
第九章	情欲に堕ちる……………	87
第十章	終わらせる覚悟……………	131
エピローグ	……………	171

七

深夜の奇祭

社務所の障子戸がきい、と軋みながら開いた。

現れたのは、南見奏多の姿をした出雲陽菜。

静かに、だがどこか確信的な歩みで、彼女は部屋の中央まで進む。

「……驚いたな」

部屋の奥。机に両肘をついて座るのは、黒の作務衣に身を包んだ男。透真。

「戻るとは思わなかった。奏多なら、今はいないぞ」

何も言わずに正座する。膝をつくその動作は、巫女として仕込まれた本来の陽菜の行動そのもの。

「いいえ。奏多くんには……今は用はないの」

柔らかく、しかし切っ先のような冷たさを含んだ声音だった。声帯が奏多のものでも、そこに込められた意志の強さを透真はすぐに察した。

「……ほう。じゃあ、俺に何か？」

「ええ」

陽菜は背筋を伸ばし、真正面から透真を見据える。

「わたし、おじさんに話があるの」

その一言に、透真の目がわずかに細くなる。喉仏がぴくりと上下し、湯吞を置く音が部屋に響く。

「ほお……珍しいな。今さら何の話だ？」

「おじさんが奏多くんにしたこと。全部」

一瞬、時間が止まったようだった。

だが透真の反応はあまりに静かだった。動じた様子も見せず、彼は腕を組み、瞳の奥で何かを計算するように陽菜を見つめる。

「……奏多に？ それはまた、ずいぶん唐突な話題だな。具体的に何を？」

「しらばっくれるつもり？」

陽菜の声は低く、それでいて凍てつくようだった。

「ずいぶんわたしの身体を好き勝手にしてくれてるみたいじゃない」

陽菜の声が震えることはなかった。感情を抑え込んでいるのではない。ただ、その侮蔑があまりに深く、冷たくなりすぎていた。

「奏多くん、どうせ無抵抗だったんでしょ。変態な道具とかも使って、相当調教が進んでるみたいね」

「……ふっ」

透真の口元が、わずかに笑った。それは侮蔑でも挑発でもなく、ただ、純粋な愉悅の笑みだった。

「全部知っているようだな。別に隠すつもりもない。お前みたいに無駄な抵抗をしない分、

調教しやすくて助かっているぞ」

陽菜はその言葉に眉ひとつ動かさない。ただ、視線の鋭さを深めただけだった。

「……楽しそうね」

「そりやそうだろう。お前の身体はどんどん開発されていていつているぞ。元に戻った時に即堕ちするなよ？」

「そうみたいね」

陽菜は軽蔑の目のまま微笑んだ。ぞっとするほど艶やかな冷笑。

「それで、お前はいつ元の身体に戻るつもりなんだ？ まだ男の身体を満喫するのか？」

「それは……どうかしら」

透真の笑みが止まり、表情が消える。

「まだ決めてない。とりあえず、もう少しこのままで過ごしてみようかと思ってる。奏多くの肉体は軽いし、動きやすいし、力もある。それに、他人のの視点から世界を見るというのは、案外心地いいものよ」

「ふん、お前がよくとも、奏多の方がいつまで持つか。あいつが耐えられなくなると、他人に体が入れ替わっていると言い出すと面倒だぞ」

「わかつているわ」

まっすぐに相手を見据える陽菜の視線。

「わたしだって、完全に奏多くんになりたいわけじゃないもの。しばらくの遊び。もう少しだけ楽しみたいだけ」

透真の指先が、静かに扇子を握る。

「ふむ……」

（陽菜の考えが読み切れんが……どうせなにか企んでいても小娘の策。元に戻る前にもっと調教を進めておきたいし、今は好きにさせておくか）

透真の考えの根本は全て性欲。同居の若い娘の身体を徹底的に開発して、自分の性奴隷にしてみたい、その一心に注がれている。彼にとっても、今の陽菜と奏多の入れ替わりは好都合なのであった。

「それより、わたしはそんな話をしにきたんじゃないの」

陽菜が透真の思考を呼んでいるかの如く、それを断ち切るように言った。

「わたしもね、奏多くとセックスしたの」

透真の目がわずかにその輪郭を広めた。

「なんだ、お前も男の身体に入って、本能の欲望に耐えられなかったのか」

「何とでも言って」

陽菜はあくまで無表情。だがその喉からは卑猥な言葉が続く。

「わたしの身体で喘ぐ奏多くん、凄くいやらしかった。明らかに自分とは違う反応だった。

悔しいけれど、おじさんの調教の結果ね……それで、もっともつと堕ちた奏多くんが見たくなってしまったの」

しばしの沈黙の末、透真は再び笑った。今度の笑みには含みがある。

「ククク、なんだ、お前も気取っているように見えて、血は争えないようだな。それなら話は早い。二人で奏多を徹底的に開発してやろうじゃないか」

「やっぱり。そう言うと思った」

「いいだろう。俺たちは共犯だぞ、陽菜」

「わかった。でも、一つ条件がある。これは絶対に呑んでもらう」

静かだが、相手を畏怖させるような凄みのある陽菜の声。これまでとは一気に雰囲気が変わる。

「次の調教は、わたしが主導権を握らせてもらう。それで降は、好きにしたらいいわ」

「なんだ、そんなことか。何を言うかと思えば。構わんぞ」

交わされたのは、血の契約よりも冷酷で、淫らで、破滅的な合意。

二人の意図は交差しない。だが目的は一つ。

……陽菜の身体にいる奏多を、極限の快楽の檻に沈めること。

陽菜は低い声で次の計画を話していく。透真に準備の協力を求め、だが透真本人の参加は断る。

透真は疑いもせずにその計画に乗っていく。彼の頭の中はすでにそれ以降のことを考えていた。より過酷な拘束をして、器具を使って、もちろん直接何度も犯す。そうして陽菜に元の身体に戻らせた上で、完全な性奴隷に墮とす。想像するだけで獣欲がはち切れんばかりに膨らんでいく。

舌なめずりをせんばかりの透真の真意を、陽菜が見抜いていないはずがなかった。
(わたしは、利用できるものは何でも利用させてもらうわ。奏多くんを墮とすために)

「今日は……祭事の日だ、奏多。お前の役目は、舞台に立ち、神託を受け入れること」
「神託……？」

奏多は巫女服を着て一人部屋にいた。そこに透真が入ってきて、いきなりそう伝えられたのだ。

「そうだ。まあ、難しく考えなくとも、お前は身を任せていけばよい。彼らにな」
透真の目線が部屋の外へと向く。

開いたふすまの先。そこにいたのは、十数人もの男たち。

「み、身を任せるって……！」

具体的に言われなくとも理解できてしまう。男たちはみなギラついた目をしており、まるで見下すような異様な瞳でこちらを見つめている。

(こ、こんなたくさんの相手に、俺……まさか、そんな……つ)
背筋が凍る。

とっさに立ち上がって走りだそうとする奏多だったが、男たちはそれより早く部屋の中に踏み込んで来た。

「やめっ……触るな！」

手を払おうとした瞬間、二人掛かりで腕を抑えられ、仰向けに倒されてしまう。

「やめろッ……やめろっ、何なんだ、あんたたち……！」

「抵抗しても無駄だよ、奏多くん」

声が割って入った。聞き慣れたはずの声。しかし、今の奏多にとっては悪夢だった。

「……ひ、陽菜……？」

男たちの後ろ、廊下の向こうに現れたのは、本来の奏多の姿……つまり、陽菜だった。

その目は優しさではなく、妖艶で艶やかなそれ。冷たく、そして何より、支配する側の目。

「この人たちのことは気にしなくていいからね。おじさんに準備してもらった、理性がとんじやうくらい性欲を強めてくれるお菓を飲んでもらってらるから」

「な、にを……っ」

膝が震える。羞恥で。屈辱で。

拒否しても無意味だと理解してしまっているから。

「さあ、舞台に連れて行って」

陽菜の指示に、他の男たちが一斉に頷く。

「あとは任せたぞ、陽菜。成果を楽しみにしてるからな」

透真はそう言ってその場から立ち去る。

「あ、あああ、や、やだあ……」

そして彼らに両脇を抱えられ、巫女装束のまま、奏多はずるずると引きずられるように廊下を進んで行く。

力の入らない膝。足の付け根はすでに濡れて、冷えた空気が生肌に触れるだけで震えが走る。

だが……不思議なことに、心の奥底のどこかが、熱を帯びていた。

(いやだ、いやだ、こんなの……なの……)

ぬらり、と内腿を蜜が伝う感覚が、自分がいかに欲情しているかを突きつけてくる。心で拒絶しても、身体は、女として目覚めた身体は、否応なしに準備されていた。

社の奥、木造の舞台。白木の天井、夜の闇の中に灯された数本の蠟燭。

奏多が乗せられた舞台の中央には、祭壇のような台が設置されている。そしてそこには、皮のベルトや鎖の伸びた手錠がいくつも付けられている。

「や、やだっ、やめろ……っ」

男たちの手が巫女服の袖にかけられた時、奏多の全身が震えた。

「や、やだっ……離せっ！」

陽菜の声で叫んでも、当然聞き入れてはもらえない。むしろその声の怯えが、男たちの口元に卑しい笑みを浮かべさせるだけだった。

バサ、と布が滑る音と共に、奏多の左肩が露わになり、冷たい空気が肌に触れた。

「嫌ならもっと暴れろてみろよ、無力な巫女さん」

「くっ……っ！」

野卑としかいいようのない男の声と視線。

逃れようと身体をよじつても、腕を押さえつけられ、抵抗など無力だと知らされるだけ。

巫女服の紐が解かれ、袴の結び目がゆるんでいく。まるで心をほどかれるように、奏多の抵抗もまた曖昧になっていく。

「やっ……！！ やめろって言うてるのに……！！」

だがその声すら、どこか弱々しい。脱がされるたび、晒されるたび、肌に触れる冷氣とともに感じる高揚。羞恥と恐怖と……それに混じる、得体の知れない感覚。

(だめだ……俺、男なのに……っ)

そう思うそばから、脳内を満たしていく別の思考。

このまま、何をされるのか。

これまでの調教とは比べ物にならない凌辱が近づいている。

これから自分は、陽菜の身体で、どんな風に、どんな声を漏らしてしまうのか。

(……いや、違う……俺、今、それを……)

想像してしまっている自分に気づき、胸がギュッと締め付けられる。

頭の中で必死に否定しても、股の間がじんわりと疼いていた。ショーツ越しに、肉の奥がキュンと収縮する感覚さえある。

「ふ……あ、や、やだ……っ」

吐息が甘く漏れ、思わず口を塞ぎたくなった。

そんな羞恥に苛まれながらも、着衣がひとつ、またひとつと剥がされていくたびに、全身の感覚は鋭敏になっていく。特に乳房の先端が、空気に触れたとき、キュッと硬くなるのがわかった。

「おいおい、まだ脱がしてるだけなのに、もう乳首が勃ってきてるじゃねえか」

「巫女さんとやれるだけで儲けものなのに、しかも変態巫女さんだとはな」

好き勝手なことを言う男たち。

その指先が無遠慮に乳房の中心に触れるだけで、ぞくん、と背筋が震えた。

（くそっ、なんで、俺、こんなに……っ！）

続いてズリ落ちた袴が、その中のショーツごと足から引き抜かれてしまう。ついに男たちの目に晒されてしまう秘所。

ついに身を守るものを全て剥ぎ取られた奏多は、拘束具だらけの祭壇へと乗せられる。

「い、いやだぁ……っ！」

まず太腿に巻きつけられたのは、幅の広い革の拘束帯だった。パチン、と冷たい金具が留められる音が響き、ひとつ、またひとつと奏多の手足が台の上に縛りつけられていく。

（う、あ……この後、俺、ここにいる全員に……っ！）

奏多はこの先の自分を想像してしまい、無意識に太腿を擦り合わせようとしてしまう。

「ああ、やだ、やめ、やめろお……」

否定しても否定しても、身体の奥で疼く期待だけは、嘘をついてくれなかった。

胸元に汗が滲む。

息が、乱れる。

一分と掛からず、奏多は全裸で台に拘束されてしまった。両手は腰の左右辺りで手首を、

両足は頭の隣近くまで持ち上げられ足首をそれぞれ固定。濡れ光り始めている秘所を相手に突き出すような、異常に卑猥な体勢。

「奏多くん、無防備でとってもエッチな姿。まずは、じっくり準備からね」

「や、やめっ……ふざけるな、俺は……っ」

言いかけた声が、くぐもった喘ぎに変わる。一本の筆が、腹の上を這っていた。そこにはどろりとした琥珀色の液体が塗布されている。

「これ、とっても敏感になっちゃうお薬だよ。いわゆる媚薬。これをみんなで、体中に塗ってあげる」

「ひっ、や……く、くすぐった……や、ば、っ……く、るしいっ……!」

最初はただのくすぐったさ。だがそれは数秒と経たずして、甘ったるく痺れるような熱に変わり、腹の奥からじわじわと腿へと伝播していく。

いつの間にか周りの男たちも筆を持っており、十数本もの媚薬塗れの筆が奏多の身体に迫る。

胸。

乳首。

脇。

脇腹。

太腿。

「ひゃああああ……っ、や、やめっ、塗るなあっ」
べつとりとした筆先が肌の上を撫で回していく。

ナメクジが這った後のように粘液の筋が描かれ、さらのその部分が時間差で熱を生み始める。

（こ、これ、マズいっ！ か、体が熱くなって……っ！）

思い出されるのは、除霊をさせられた際の霊たちに使われた淫らな注射。それを体中に塗りたくられているのだ。

「こんなところはどうか、奏多くん」

陽菜の持つ筆先が足裏の中央、土踏まずをくると撫でる。

さらに別の男の筆が爪先を一本一本、微細な筆致で液を塗り込んでいく。

「んああっ！ ひあ、く……や、だめっ、そこは……っ、なんで……ッ！」

奏多の理性が軋む。自分の身体じゃない、自分の声じゃないのに、感じてしまう。足裏のただの皮膚が、こんなにも敏感に、快楽を送ってくるなんて。

「ふふ……性感帯が一つ増えちゃたね」

笑う陽菜。

そうしている間にも全身に媚薬が沁み込んでいき、奏多の体温はどんどん上がっていく。

「あ……はあ……んっ……く、くる……っ、や、だ、なにこれっ……やめ……やめろっ……！」

泣きそうな、けれど泣ききれない声音。身体の奥、なにかが灼けるように疼いている。

「巫女さん、やっぱりド変態だったんだな。手のひらに塗ってるだけでどんどん濡れてるぞ」
筆は手の平、指、そして指の股も塗り残しがないようにじつくりと塗り込んでいく。

「い、いや……うそっ、そんな、俺……違うって……！」

媚薬は下腹部にも作用し、奏多の秘所はすでに熱く、何も挿入されていないのに鼓動に合わせて脈動していた。

別の筆が肩の上を這っている。ゆつくりと二の腕へ向け、押し付けた筆の穂先を走らせていく。

「んっ、ふああっ……、や、やつ……め……っ、ん、く、ふううんっ……！」

自分の口からこぼれる艶声が、耳に届くたび、何かが壊れていく。

違う。違うはず。俺は男なのに、なぜこんなに……。

そして、筆はついに太腿の内側にも穂先を向ける。

秘所にたっぷりと媚薬を擦り付けていた筆が、少しでも角度を変える。その筆先が触れたのは、すでに硬く尖っているクリトリス。

「くっひいいいいっ！ そ、そこはやだっ!!」

奏多の背が跳ね上がる。だが固定され切っている体は台座をガタンと鳴らしただけ。

「やだっ、やだやだ、やめてっ、んひいいいいいつっ♡」

奏多の懇願は無視され、容赦なく筆が押し付けられる。粘度の高い穂先がクリトリスを押し潰し、グリグリと押し付けられる。

どんどん全身を性感帯へと変貌させられていく奏多。

「そろそろね。あれを持ってきて」

頃合いを見た陽菜が、さらにとどめを刺すべく指示を出す。

それは、二本の浣腸器。注射器を何倍にも巨大化させたかのような、本来は医療用の器具。だがその中には、今奏多の身体を蝕みつつある媚薬が満タンに詰まっている。

「ひ……っ、なに、それえ……っ！」

初めて見るその禍々しい姿に、媚薬の回った奏多ですら恐怖が勝ってしまう。

「これ、奏多くんの中にね。媚薬をたっぷり注いであげるための器具だよ」

陽菜が指示を出す。男がまず一本を奏多の秘所、ぽっかりと開いてしまっている膣口へとあてがう。

「うそ、だろ……っ」

筆で塗られているだけで散々に喘いでしまっている媚薬。それを直接注ぎ込まれてしまったりしたら……！